ー報告ー

アレックス・ラ・グーマ/ベシィ・ヘッド記念大会に参加して

「黒人研究」

第 58 号（1988）

36 ペイジ。

玉田吉行

８月３日、４日の両日、カナダオンタリオ州セイント・キャサリンズのブロック大学で、アレックス・ラグーマ/ベシー・ヘンド記念大会が行なわれた。特別ゲストとして招かれたラ・グーマ夫人をはじめ、カナダやアメリカに亡命中の南アフリカの人々、それにソ連やナイジェリアからの参加者もあった。

在りし日のラ・グーマの姿を伝えるブランン夫人や主催者のセスゥル・エイブラハムズ氏（ブロック大学）、ラ・グーマのケープタウン時代の親友ジョージ・ルーマン氏（カナダ在住）など、身近だった人々の発言には、ずしりと重みがあった。又、小林信次郎氏の翻訳などでもおなじみのコズモ・ピーターサ氏（オハイオ大学）と他二人によるラ・グーマとヘッドの作品朗読もラジオ劇風の迫力が感じられた。

二日目には、プログラムにはなかったが、特別ビザを得て南アフリカから直接駆けつけたアハマト・ダンゴル氏よる現状報告があり、会場が俄かに活気づく場面もあった。ブランシ夫人とダンゴル氏の談話は、翌日、地元の新聞に写真入りで報じられた。

参加者が５０人程度と、国際大会としては決して大きなものではなかったが、１９８５

年と１９８６年に客死した二人の偉大な南アフリカ作家を偲んでの記念大会が開催された意義は決して小さくはない。

大会では、日本の現伏に少し触れたあと、ＡＮＣ東京事務所のマツィーラ氏からのメッセージと『三根の縄』（のちに、『まして束ねし縄なれば』に改題）についての論文を読んだ。日本は、南アフリカを苦しめている筆頭国の一つだが、その国からの参加者に対する温かい視線は私には何よりもうれしかった。と同時に、経済大国日本に寄せられる期待の大ききをも、今更ながら。痛感せざるを得なかった。